

二十一世紀をめざす教育

足利市立第二中学校教諭 中原 将夫

序 論

最近、未来学も花盛りとなり、各種の出版物もでてきたが、それらの中には技術革新と生産性向上による豊かなバラ色の経済社会に対するビジョンに過ぎないように思われるものもある。

しかし、21世紀をめざす教育者がここで真剣に考えなければならないことは、現実逃避のための未来論ではなく、また、物質文明を満喫するための未来論でもない。むしろ、高度に発達した物質文明の時代において、人間はどのように対処していかなければならないか、あるいは、どのような教育が行なわれなくてはならないかということが重要な問題となってくる。また、現在の中学一年生が大学を卒業して実社会で活躍するのは十年後であるから、未来への展望なくして生徒を教育することはおよそ意義の薄いものになってしまう。また、未来への展望のない進路指導は正しい指導とは云えない。そのため急速に発展しつつある現代社会においては教師も生徒もたえず未来に目を向けて前進しなければならない。

以下、述べることは夢物語のように思われるかも知れないが、現在、外国では行なわれているような点も少くないので、決して夢物語ではなく、21世紀を待たずに実現可能なものばかりを書いたつもりである。

現代社会の考察と未来への展望

21世紀初頭には、人口は現在の2倍、労働時間は2分の1となり、実質国民所得は10倍に達するといわれているが、それがすなわち人類の幸福と結びつくかどうかを考察してみる必要がある。

そこで、まず、20世紀をふりかえってみよう。この時代は物質文明とか産業主義の時代で、物質的なものへの執着と追求に全力があげられ、精神文化の沈滞、道徳観念の低下の傾向がみられ、教育も全人的な教育よりも現在の産業界の要請にあう方向に向かい、カントの言葉に反して、人間はそれ自身目的というよりむしろ道具とみなされがちである。

しかし、21世紀に近づくころには物質文明もらん熟期にはいると思われるので、かえって、物質文明に対する反省、批判の声が大きくなり、人々の目は精神文化へと向かってくる。すなわち、物質文明と精神文明の調和ということが大きな課題となってくる。そして、職場においても生産性向上と人間性向上とが調和されることが望まれてくる。教育の面でも、ペスタロッチが述べたような理性、情操、職業の三つが調和した指導がなされるようになる。

また、21世紀に労働時間が現在の半分ともなれば、「小人閑居して不善をなす。」という心算が起こってくる。そのため、余暇の善用ということ是非常に大きな課題となってくる。今日でも、すでにレジャーブームとか消費ブームとかいって人々はかなり享乐的となっている。昭和42年中にギャンブルに使った金が何と1兆円だそうである。スポーツも見せ物やギャンブルの道具として使われ、スポーツを行なり者と見て楽しむ者と二つに分れつつある。これはローマ帝国末期の現象と全く類似

しているので、余暇の利用については真剣に考えなければならない。激動する国際情勢の中で日本だけが昭和元祿とかいって現状に甘んじていてよいのだろうか。われわれは余暇の増大とともに、ローマ帝国末期への道を歩むか、それとも第二のルネサンスの時代を迎え、学問、芸術の花を開かせ、調和のとれた全人的人間の理想とする社会を迎えるかの岐路に立たされているのではないかと思われる。

医学部門でノーベル賞を受賞したアレキシス・カレルは『人間この未知なるもの』の中で、「近代文化は失敗したのである。……人間が真に自分を知らなかったために、この世界を人間自身のために向くように建築することができなかったのである。あらゆる物質の科学が生物の科学をぐっと追い抜いて発達したことは、まことに人間の歴史の最も悲惨なできごとの一つである。」と述べている。

このように、物質の科学が人間自身を無視してはく進する時、人間はもはや科学の主人公ではなく下僕、あるいは、被害者となってしまふのである。そのため、今後の人間研究は動的な面およびより内面的な面まで進まなくてはならない。そして、科学の利用は人間尊重の立場に立ってなされなければならないのである。かくして、21世紀には人間の主体性を回復し、精神文化の黄金時代を迎えるような方向に教育もかじをとっていかなければならないのである。

学校教育と社会教育の分野の明確化

21世紀の初頭では、まだ産業界における国際競争は分業と協調体制をとりながらもさらに激化してくることが予想されるので、たえず技術革新と経営の合理化のために全力を注がなくてはならなくなる。こうした時代においては教育ももはや学校教育だけでは間に合わなくなり社会教育の充実が実現し、両者の一貫性が保たれるような配慮がなされてくる。そこで、学校教育と社会教育の分野が明確化されて、放課後のクラブ活動はなくなり、宿題はいっさい出されなくなる。しかし、各都市には現在の西ドイツのように子どものための文化施設、体育施設、娯楽施設が完備されていて生徒は各自そこへ行ってそれぞれの専門家から指導を受けたり、他の学校の生徒と運動や学習、レクリエーションを行なって切さたく磨かれたり、友情を深めたりする。

学校は国内および外国の学校と姉妹校となり、相互の交流をはかり、文通や資料の交換、教師、生徒の交換留学を図ったりするようになり、生徒の目は広く世界へと向かい学習意欲は増大してくる。

また、家庭教育と学校教育の役割が明確化され、学校でやるべきことは家庭ではやらず、家庭でやるべきことは学校でやらなくてもすむようになる。その結果、家庭においては、ピアノのレッスンや文学書、歴史書、英語の小説等の多読ができ、教養を身につけたり、自己の能力を存分に伸ばすことができる。また、家庭のしつけも徹底してくれば学校教育の効果も倍加されてくる。家庭教育の充実のためのPTAスクールも活発になってくる。地域の社会教育活動も活発になり社会教育主事も多勢おかれるようになる。

ゆきとどいた生徒指導

学習能率の向上と教材の精選によって、授業時数は一日5時間となるが、毎日、学級活動30分、学級指導30分の時間が設けられ、人間的触れ合いを多くする他、各種検査の実施やコンピューター

(電子計算機)の使用,専任カウンセラーの配属と深層心理学の発達とあいまって生徒指導はゆきとどいたものとなる。こうして非行少年は減少するが,社会の風潮を反映して道德観念の低下や富の豊かさに比べて心の貧困さをおおいにかくことができず,道德教育,宗教教育の重要性が今日よりさらに叫ばれてくる。そうして,宗教心理学や超心理学の発達によって宗教にも科学のメスが入られ宗教も科学的に理解されて,宗教的情操を養う教育が積極的に行なわれるようになる。

また,人々はルソーの「自然に帰れ。」という言葉を思い出し,自然を愛するとともに古代文化や未開社会のよい点を文明社会の中に生かそうとつとめる。そして数千年の歴史をもち,しかも宇宙飛行士の訓練にもとり入れられているというインドのヨガの真価を認識し,画一面指導の弊害に驚き,心理学的,生理学的個人差になかった個別指導に重点がおかれてくる。従って,体育などもラジオ体操よりも各人の体癖や性癖を直す矯正体操に重点がおかれ,給食も定食ではなく偏食,性格,体質を直すための数種類のコースが用意されてくる。各人の献立ては学校医,栄養士,コンピューターの診断によって決定される。かくして,肥満児とか虚弱児とかいわれる生徒がいなくなる。また,生活が安易に流れやすいので日本武道で心身を鍛える。

個別指導に重点が移るとはいえ,集団指導の意義がなくなったわけではない。むしろ,日本の第三次産業は第二次産業とともにますます伸びる産業でもあるので日本人の社会性を育てていかなければならないのである。また人間関係がうまくいかなければ,欲求不満となり,生産性も向上しない。従って,集団指導の重要性もかえって認識されてくるのである。そして,教育心理学も高度に発達し,教師の心理学や生理学に対する知識は深くなるので,より適切な指導が行なわれるようになる。

能率的な学習指導

最近,アメリカで行なわれはじめたチーム・ティーチングが一般的となり,教育器具はふんだんに使われるようになる。そのころ,一学級の定員が30名になっている。そこで,チーム・ティーチングの編成方法を考えてみると次のような方法もあげられる。

社会科を例にとると,

	学級数	人数	時間(%)
大グループ	3	90	20
小グループ	$\frac{1}{3}$	15	40
自学自習グループ	3	90	40

大グループは導入,まとめ,テスト等に使われ,講義と視聴覚器具を利用したの授業が中心となり能率的な授業が行なわれる。

小グループでは討議や個別指導が中心となりゆきとどいた授業が行なわれるとともに教師と生徒との親和感が高まる。

過渡期の段階では中グループでの学習も併用される。

自学自習は課題学習や小グループの時の討議の準備にあてられる場合とティーチング・マシンによる能力差に応じた教育にあてられる場合とがあるが,教師はこの時間にも出て生徒の質問に応ずる。

なぜ自学自習の時間が重要であるかという点,今日では,教師も両親もともすると過保護になりが

ちで自己教育のできない生徒を社会に送りがちであるが、勉強は一生を通じて行なわれなければならないものであり、特に変化の激しい時代においては、学校で習った知識や技術ではとても間に合わない。独力でも新しい知識や技術を取得し、しかも、発明、発見する態度や能力がなければ資本と資源に乏しいわが国の生きる道はないのである。また、自学自習の時間では時に能力に応じた学習を進めることができるわけである。

学校の建物も現在のものとはまったく異なり、大グループのための大教室と中グループ（教科によっては中グループもある。）およびホーム・ルームのための中教室、小グループのための小教室となっておる。図書館は静かに読書する部屋とグループ研究に都合のよいいくつかの部屋に分かれていてお互いの邪魔にならないようにしてある。また、図書館にはコンピューターもあって調べようとする事柄に関する情報を提供してくれる。特別教室としては、シンクロファックス（集団反応装置）やLL（語学練習装置）等の部屋もあってティーチング・マシンはその偉力を発揮してくれる。もちろん採光、換気、冷暖房は完備され、机や椅子は調節できるので学習能率は著しく上がる。しかし、あまり便利になると耐久力や抵抗力が劣ってしまうので体育の時間にはハード・トレーニングも行なわれる。

21世紀までに日本が得意としなければならない産業部門は原子力、オートメーション、コンピューター、宇宙開発というような高度の科学技術を必要とする分野である。また、企業の組織もコンピューターの出現によって部長、課長等の中間管理職が少なくなり、トップと平社員という関係が多くなると、トップや高級技術者、学者養成のための英才教育の必要性がますます増大し、教科によっては現在アメリカの一部で実施されている無学年のクラスができる。天才と精薄児のための特殊教育はそれぞれ別の学校で行なわれるようになる。

教科指導に際しては、理解、判断、記憶よりも創造力開発に重点がおかれ、入学試験や就職試験でも創造力に関するテストが重視される。また、問題解決の能力の他に、問題を発見し、作成する能力が養われるようになる。これらの能力についてはティーチング・マシンやコンピューターは無能力なので、この面における教師の役割は非常に大きくなるのである。理解、判断、記憶についてはハードウェア（電子計算機や教育器具等）が偉力を発揮するが、教師はハードウェアを如何に利用するかというソフトウェア（利用技術）の研究に多大の時間とエネルギーを注がなくてはならなくなる。

しかし、教員定数や事務職員の増加、教材の精選（ドイツで行なわれている範例方式）、チームティーチング方式の採用により、教師の一日の授業時間は2～3時間となるので教材研究やソフトウェアの研究も充実したものとなる。

指導資料センターおよび資料室

各学校には資料室があってたくさんの資料やハードウェアが整理されて保管してある。そして、教師が管理にあたるが、印刷、録音、録画や事務は専任職員があたる。資料の収集については父兄や生徒にも協力してもらおう。資料室には大工道具もあって簡単な教具は作成してしまう。

また、各都市には、指導資料センターがあって必要な時にはいつでも資料を借りることができるし教師や生徒は行けば、いつでも指導者の指導や説明を聞くことができる。このセンターは各機関と密

接な連絡をとり、たえず最新の資料も収集しているので、資料は豊富にある。また、コンピューターもあって必要な情報を提供してくれる。それから、このセンターでは教師の研修も行なえるようになっていて、大学教授、指導主事、教育研究所やセンターの研究員がみえて講習や研究会が定期的に開かれる。

しかし、ここで問題になってくるのは教育予算の増大である。現在すでに新興国が教育に力を入れるようになり（アフリカのガーナでは義務教育は10年）多額の教育予算をくむようになってきたので先進国もこれに刺激されるとともに、先進国同士の競争も激化してくるので教育投資に全力をあげるようになる。

実践への道

本校社会科研究部では昭和42年度より社会科教室兼資料室を設け、資料の収集、整理、教材、教具の研究を進めている他、一年生の地理を例にとりてティーム・ティーチングの研究を行ない、できれば近く実施したい意向をもっている。また、英語科、数学科ではすでにシンクロファックスをとり入れて研究を進めている。

今日、世界的な教育の危機とか爆発とか叫ばれているが、歴史で名高い足利学校の地、足利で21世紀への教育の道をいち早く進みたいものである。